得るにより述べん。四十六歳、男子、初診、昭和六年九月十六日、既往症として十五年前に花柳病を患ふ。主訴一ケ月以來兩眼視力障碍、神經系統には特筆すべきことなし。現症としては兩鼻側半盲あり、兩瞳孔反應あり、視神經乳頭に萎縮像を見、血液及び腦脊髓液のワ氏反應は强陽性なり。驅黴療法を行ひしも一ケ年後に全く失明す。

（原田抄）

（中央眼科醫報第二十五卷第五號）

（二）、「ヒステリー」性眼症狀に就て

高橋重勝（岡山醫科大學眼科教室）

一、「ヒステリー」患者にて眼症を現すは性的には女子は男子の二倍に當り、年齡的には三十歳乃至四十歳の間に於て最も多きを示す。

二、諸症例の直系尊族に酒客を有すること多く、酒毒が本症發生の一素因を構成し、母體の不健康殊に妊娠、出產時に於ける衰弱竝に疾患はこれを助長し、患者既往の全身的疾患と精神的變動とは共に本症發生の誘因をなすものと考ふ。

三、器質的變化なくして眼症を證明する場合多し。

四、視野は一般に求心性狹窄を蒙り色視野の大さは健常眼に於けると異り大なるものより凡て白、赤、青の順位にあり。

五、光神も障碍せられ殊に暗調應機能を計測するに暗調應開始後より光神悪しく、經過中感光度の變動著し、尙一般健常眼に見るを得ざる光覺過敏症を現す事あり。

六、色覺は一般に鈍麻を來す、元色に對する意、判斷力の減退によるならん。

七、調節痙攣と眼瞼搐搦症の現れる折はその發作時に眼壓上昇を證明す。しかし「ヒステリー」性患者に於ける眼壓は肉體的、精神的影響に支配さるること大なり。

八、本治療法は暗示療法を試むることにより有効なり。

（原田抄）

（中央眼科醫報第二十五卷第五號）

（一）、赤色光線を以て種々なる網膜部位に於ける暗調應機能計測

田代保光（大阪帝大）

一、赤色光線を以てせる暗調應機能は中心部位の感光度最も佳良にして中心部位を遠ざかるに從ひて漸次減退す。

二、網膜の同一緯度に於ては大體同一なる赤色光線に對する感光度を有す。

三、網膜中心部位の光神は暗調應初期より十五分迄急激に

増進し、其二十五分まで緩慢に増進す。

四、網膜周邊部位の光神は暗調應初期より五分乃至十分まで増進し、其以後は稍々光神減退す。之は各水平及び垂直子午線上に於て同一なる關係にあり。

（安岡抄）

（中央眼科醫報第二十五卷第五號）

二、鐵片外傷にて鐵片の眼内に殘留せる眼の暗調應機能計測（表四、圖五）

田代保光（大阪帝大）

著者は實驗裝置として、明調應器とナーゲルの暗調應器とを用ひたり、固視點は暗調應器の上下左右に視角に相當したる目盛を施したる場所におけり。

第一實驗は被檢眼を明調應器に向ひて五分間明調應をなさしめ、直ちに絶對暗室となし一時間後に光神を計測す。本實驗は水平子午線上に於てのみ行へり。

第二實驗は左眼の中心部位、固視點より鼻側へ三〇度の部位及び右眼の中心部位に於て行へり。結論として

一、本患者に於て鐵片嵌入部位の光神は健常眼の同一部位の光神の1/65に減退す。

二、該部位の光神のみならず疾患眼の各部位の光神も著しく減退せり。

三、本例では圓錐體暗調應機能より圓柱體暗調應機能甚だしく障碍されたり。

（安岡抄）

（中央眼科醫報第二十五卷第五號）

牛眼に於けるデツセメ氏膜斷裂の成立時期に關する一考察

弓削經一（京都府立醫大）

デツセメ氏膜斷裂は牛眼、圓錐角膜、外傷殊に分娩外傷の場合に觀察さるるものなり。一般にデツセメ氏膜斷裂には或斷裂症狀を伴ふものなり。故に其症狀の發現を以て牛眼に於けるデ氏膜斷裂の成立時期となし得べし。デ氏膜斷裂は房水の侵入、實質の膨脹よりなるべき混濁を伴つて起り、内皮の修復現象の完成と共に斯る角膜混濁は消失し、明瞭なる斷裂の所見を示すとすべきなり。此症狀は牛眼と成立を同じくするか、其經過中に起り得べし。エルシュニツヒは牛眼に於けるデ氏膜斷裂の成立時期は分娩以前又は分娩直後なりとするも、果して牛眼に於けるデ氏膜斷裂が總て斯る早期に成立するものなるや疑問にして、又牛眼に於て高眼壓の存し、眼膜伸展を考へられるべき後期に於ても新しく成立する可能性あ